

「シラカバと蝶(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

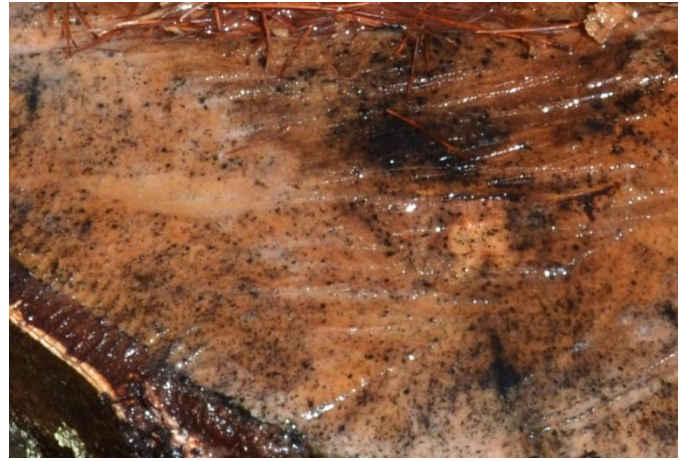
冬の間、まるで「永久凍土」のように凍っていた高原の土も、少しずつ融けてやわらかくなってきた。そうになると、動植物の様子にも変化が現れる。



裏庭には昨年の秋に切った、シラカバの切り株が3個ある。この切り株にも変化...というより異変が現れていた。



雨も降っていないのに、切り口がぬれているのだ。シラカバは、クリやコナラなどのブナ科の樹木とちがって、切り株から芽を出して、それが新しい木として育つことはほとんどない。地上部を切ってしまうと、あとは根も切り株も腐って、数年でボロボロになってしまうのが普通だ。しかし、これは伐採後半年しか経っていないので、まだ根が生きているのだろう。春が近づいて、水を吸い上げ始めたらしい。



普通なら吸い上げられた水は、そのまま幹を伝って、枝まで達するはずである。それが冬芽を育てて、新緑の木に戻るはずだ。しかし切られてしまったので、その切り口から水が溢れているのだ。



切り口から溢れた水は、切り株の樹皮を伝って、地面にまで達している。相当の量を吸い上げている。



こんな水分でも「樹液」には変わりない。その樹液を目当てに、さっそく昆虫が来ていた。最初は気づかなかったが、どうやらチョウカガのようなものが樹液を吸っているようだ。何だろうか？